

フェデリコ・ズッカリ作《アペレスの誹謗》解釈 ——ミネルヴァとメルクリウスを中心に——

川上恵理(神戸大学)

本発表は、フェデリコ・ズッカリが1569年から1572年頃に描いた2作品の《アペレスの誹謗》(イギリス王室コレクション、パラッツォ・カエターニ)を扱う。古代ギリシアの画家アペレスが描いた作品の《誹謗》は、ルキアノスの記述に基づきルネサンス期に絵画化されたが、本作品はそれまでの図像伝統から大きく逸脱している。ズッカリはここで、人物像の変更および追加と、構図の大幅な変更を行った。本発表では特に、本作品に現れたミネルヴァとメルクリウスの機能について考察し、作品の再解釈を行う。

本作品が制作された背景として、先行研究ではアレッサンドロ・ファルネーゼ枢機卿との確執が頻繁に取り上げられ、同様の背景を持つとされる彼の後年の2作品《絵画の嘆き》(1579)、《美德の扉 *Porta virtutis*》(c. 1581-1582)が引用されてきた。本作品に関しては、1569年、カプラローラのファルネーゼ宮殿の装飾の際、意見の不一致からズッカリは任を解かれたことが指摘される。たしかに本主題は画家の個人的な状況から描かれることが多いが、本作品が怨恨によってのみ描かれたとみるよりも、制作時期周辺のズッカリの美術アカデミーに関する活動をも考慮すべきである。当時のイタリアではアカデミーが設立され始めており、ズッカリ自身も1570年代にフィレンツェ素描アカデミーに教育改革案を出している。

この動向に関連する可能性を検討するため、本作品で対となるような位置に描かれるメルクリウスとミネルヴァに注目する。メルクリウスはここでは恐らく画家を庇護下に置くが、それは、15世紀からすでに、惑星の神々を描いた一連の版画のうち、メルクリウスの版画に画家の姿が頻繁に現れ続けていることから裏付けられる。また、二神がズッカリによるカプラローラのファルネーゼ宮殿の天井画《ヘルマテナ》(1566-1569)にも描かれることに鑑みれば、彼がヘルマテナ主題を意識していた可能性もある。同主題はメルクリウスとミネルヴァから成り、雄弁と知恵の徳が一体となることを示すため、古来アカデミーと結びつけて用いられた。ボローニャの人文主義者アキッレ・ボッキはヘルマテナを彼のアカデミーの象徴とし、自身のエンブレム集『シュンボルムの問題』(1555)にも掲載している。それゆえ、ズッカリの本作品でも美術アカデミーと結びつく可能性が見いだせる。

また、そもそも「アペレスの誹謗」主題自体が、絵画の自由学芸と等しい地位を主張する考えに結びつき得る。同主題はレオナルド・ダ・ヴィンチによって、絵画が詩と同様、人の行為を再現し、道徳的目的を達成することができる例としても引用されている。すなわち、美術も詩人のそれと同様に高尚なものだと示す理由になった。

このように、時代背景と、変更された本作品の人物像、そして主題が当時持っていた意味とその受容を通して本作品が画家の地位向上と関わる可能性を示唆する。